
ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

【Nコード】

N9258Y

【作者名】

イルカ

【あらすじ】

俺はダンジョンを探索する探索家だ。夢はそうだな、もちろん男ならハーレム！それもだ、名声と実績で美女が寄ってくるハーレムだ、わかるか？

しかし問題が色々あるわけ。そう、質の悪いストーカー（美少女）に付きまとわれてるとか、ファミリーの神様が超美男子で女をみんな持っていてっちゃうとか、な。

でもさ、未だ謎とされてるダンジョンの謎を解けば、絶対ハーレム完成だよな。

だから俺は今日もファミリイの仲間とダンジョンに潜る。

ブローグ

「前方にオークチーフが2体POP、右からはビッグブラッドバツトが4体。ヤバイ、ヤバイよ囲まれる。」

サポートに徹してるチールが叫ぶ。

しかし前衛の俺とカルシュは今日の前のミノタウロスを相手にするので精一杯だ。

「マーリツシュ、ベルサリア、魔法で迎撃。バックスは足止め、頼むぞ。」

俺はみなに指示を出す但既に連続戦闘時間は1時間近い。そろそろみな、特に女性陣は体力の限界が近づいているだろう。

そろそろ退却を考えるべき時に来てるのかも、と思うが、まだそこまで追い詰められている訳でもなく中々決断できない。

「ダアアアア」

その時、危機に瀕すれば瀕するほど燃え上がるという難儀なスキル持ちのカルシュは一気に気合が入ったのか猛然とミノタウルスに切りかかる。たぶんスキル発動したな。

そのお蔭で長身カルシュの身長もある大剣が、ミノタウルスの堅い筋肉をやすやす切り裂き、右肩付近から右腕を切り飛ばすことに成功した。

ミノタウルスが絶叫と共に仰け反る。チャンス

「我まといしは魔を切り裂く光の雷。剣に宿りて全てを切り裂きし刃となれ」

雷を剣にまわりつかせながら動きの止まったミノタウルスに突進する。

俺の唯一使える魔法、それがこの雷エンチャントだ。

自分の剣にしか使えない、詠唱が長い、持続時間が短い、燃費が悪いと四拍子揃って使いにくいんだが、威力は絶大。

「うおお」

気合一閃、失われた右腕の箇所から一気に胴体を輪切りにする。

ちなみに今の俺ではエンチャントがかかってない状態だと、精々剣が食い込む程度の威力しか出せない。

「カルシュ、オークチーフとビッグブラッドバットに苦戦しているマリーツシュ達の援護に向かうぞ」

「待つてマズイ、後ろでミノタウルスが2体POP中だよ。何とかしないと退路を断たれる！」

再びチールが叫ぶが、その叫びには先ほどよりはるかに危機感がこもっている。

危機がピークに達している現状で、カールはすでにミノタウルスへ向けて走り出している。たいして俺はエンチャントの効果時間すでに終了しており、剣にまわりついていた雷は消滅。攻撃力は激減中だ。

いくらカールでも単独でミノタウルスを倒しきることは難しい。撤退を成功させることだけを考えねば全滅の危険性もある。

「つく、ミノタウルスは俺が足止めする。チールは魔石とドロップアイテムの回収、それが済みベルサイヤはかく乱魔法、同時に全員退却。14層への階段まで走れ。」

俺は素早く指示をだし、身をひるがえす。

「グオラウウウウ」

直後、ミノタウルスのそれより遥かに大きな雄叫びと共に、ミノタ

ウルスの胸の急所、魔石の部分から巨大な手が生えた。2匹のミノ
タウルスはあっけなく消滅。
その手が握ったミノタウルスの魔石はすぐさま巨大な口へ運ばれ消
えた。

「ら、ラノタウルスだと・・・このタイミングで。」

カールが隣で呟く。15層のフロアボスたるラノタウルス。サイの
ような顔と三本角を持つ巨大な人型モンスター。そう俺たちがこの
場所で1時間も狩りを続けていたのは、こいつを待っていたからだ。
しかし、これはタイミングが最悪。みな疲弊しておりオークチーフ
など、雑魚とは呼べないレベルのモンスターを相手にした状態。ミ
ノタウルスを一撃でぶち抜くこの怪物と戦えるだけの余力は到底持
ってない。

不味い、ホントマズイ。これは、ヤバイって。

「全員即座に退却。走れ。」

もうアイテムとか魔石とかそんなものはどうでもいい。このままじ
やアレが来る。そしてまた取り返しが・・・

「はあい。オイタはいけませんよー。私”を”愛する人に近づくな
んで最低ですねー。」

場違いな甘い猫なで声。

と、同時にラノタウルスの体を幾筋もの銀光が通り抜ける。

「グオ？」

間抜けな声。そしてフロアボスたるラノタウルスは振り返る事すら
なく、あっけなく解体された。

「はあい。私”を”愛するマイダーリン。無事？」

その女は軽やかにステップを踏みながら、俺たちが散々苦戦してい
たモンスターを一瞬で解体していく。

流石は現在、最強の一角とみなされる女剣士だ。この華奢に見える体にどれほどの力を内包しているのだろうか。

しかし、

「やっぱりもう来たのかよ・・・まあ助かった・・・けどよ」
俺の疲れたため息が15層のフロアに染み込んでいった。

プロローグ（後書き）

初投稿作品です。見づらい所も多々出てくると思いますが、都度修正したいと思しますのでよろしく願います。

第一話

3時間かけてダンジョン15層から地上まで戻った俺達は入り口でいったん解散した。

俺とチールは探索ギルドへ、他のメンバーはファミリーのホームへ戻り先にステータスの更新だ。

まあ、俺として疲れきって（主に精神的に）いたのでホームへ戻りたかったのだが、ギルドの依頼を受けていた以上、ファミリーリーダーとして真つ先に報告する義務があるのだった。

ダンジョンの1層入り口からわずか30歩、重厚な石積み の2階建ての建物、表には両手剣に竜の牙を型どった意匠が施された木製扉。まるでダンジョンから街を守るような佇まい、それが探索ギルドだ。

「うーす。」

俺はその木製扉を空けつつ適当な挨拶をした。

中にいるのはむさいヒューマンのオッサンが4割、ゴツイお姉さまが1割、竜人族・獣人族・精霊族で5割といった感じだが、その大半がこちらをチラッと見ただけで興味を失ったように視線を戻す。

俺たちのファミリーはまだまだ無名だからな。

「お、グランディラファミリーじゃねえか、お前らラノタウルスの討伐受けたんだってな。どうだうまく行ったのか？」

「あの面見たら失敗だって分かるだろ。きっとまたストークマスタークイーンに助けられたんだぜ。」

「ギャハハ、ちげえねえ。ボーヤも大変だわな『追跡の剣姫』に愛されて、ギャハハハハ。」

前言撤回、俺たちのファミリー（というか主に俺）は意外と有名で

ある。実力とは別の所で。

俺はこの手合いは無視することにしてる。相手にしても良い事って何もないからな。

真っ直ぐカウンターに向かい、空いていた席に座る。

「探索ギルドへようこそ、どのようなご用件ですか？」

ギルドの受付は全員女性だ。名前は覚えてないけどな。

え？ハーレム作りたいなら女性の名前ぐらい覚えるべきだろうって？
ハーレム要員じゃない女んでどうでもいいんだよ。

「依頼の報告に来了。ラノタウルの討伐、それとモンスターカラのドロップ品だ。」

そう言っただけは依頼書を懐から取り出す。隣ではチールが道具袋から魔石とアイテムを幾つか取り出している。

「確認致しますので少々お待ち下さい。」

そう言っただけアイテムをまとめて受付嬢は裏に下がる。

それを待ってたように一人の竜人族の女性が声をかけてきた。

「やあ、ラノタウルス討伐に行ってたんだって？今の様子だとうまく倒せたみたいだな。おめでとう。あれはフロアボスとしてもかなり強い方だと言う事はよく知っているよ。私もあれの討伐に行ったことがあるからねえ。」

そう言っただけ声をかけて来たのは妖精族のミリテットだった。相変わらず派手な羽を持った細い女だ。いやここまで細いと骨だな、うん。俺基準で60点。俺はもっとここの肉付きが良くて、ほらここの腰かお尻の辺りが艶かしくないと、わかるな？

ちなみに顔は80点である。頬肉が足りない。

俺があまりに全身を上から下までジロジロ観察したからだろう

「相変わらず君は無遠慮だよ。そんな目で私を見るのは君ぐらいだよ。」

ミリテットなどとは苦笑しながら、それでも隣に椅子を持つてくる。

「こ、これは『銀羽の天女』様。うわあ、間近で初めて見ました。ほ、本当にお綺麗で、です！

ああ、私は獣人族のチール。グランディラファミリーのサポートです。よ、よ、よろえ。」

「噛みすぎだ。全く、なんでこんな派手羽女に緊張するんだか。」舌を出してハアハアしてるちよつと変態ばいチールの姿（舌を噛んで相当痛かったらしい）を呆れながら俺は見る。

「私の事を派手羽女とかいうのは君ぐらいだよ。全く非常識なのは君さ。まあ今はそんな事どうでも良くてだね、ラノタウルスどうだったのさ？」

「じゃあ、派手羽&骨女でどうよ？ラノタウルスは、なんだ一瞬だったよ。超弱かった・・・うん、銀線がシュパシュパとなってバラバラだな。」

どうだ、俺の的確な表現。分かりやすkarうて。

「なんだ、またミルちゃん来たのかい。ホントあの子もマメよねえ。世にも珍しい彼女のユニークスキル有効活用とも言えるけどさ。

なんでこんな・・・まあ、顔は悪くないが、女を”褒める事”、ホント”褒める事も”出来ない、非紳士がいいんだか。となりのチールって子の方がよほど可愛い男だよ」

2回言いやがった。どうやら俺の論評はお気に召さなかったらしい。しかし、二十歳の男に対して可愛いって褒め言葉か？

なんかチールは喜んでるようだ。まあ獣人族は総じて可愛い種族ではあるな。耳と尻尾だし。

「分かったらあっち行つてろよ。えと『銀羽の天女』様？ッ」
「なぜ笑うかな、ホント失礼だね君は。神が付けたセカンドネーム
を笑う奴は、か、加護を失うんだぞ！ホントだぞ」

第一話（後書き）

主人公はバカ系です。一応ファミリリーリーダーです。でも馬鹿です。設定ちょっとだけ解説。

この世界では神様が普通暮らしていて、ファミリリーというものを作ります。

小規模ギルドみたいなものですね。

神様1人に1ファミリリー、人数はピンきりです。

神様は自分のファミリリーのメンバーにセカンドネーム付与とステータス更新を行えます。

あ、主人公の名前が出てなかった。多分、次ぐらいで出てきます
まだ神様出てこないかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258y/>

ダンジョンと俗物（俺）とストーカー（美少女）

2011年11月28日09時50分発行